

連載コラム



第43回 花壇の花(4) ～スカシユリ、アルストロメリアなど～



もとよし ふさお
本吉 総男

2018年6月

いつの間にか初夏を過ぎて、梅雨の季節がやってきました。憂鬱ではありますが、楽しみもあります。雨に濡れたアジサイはとりわけ美しく見えます。[「四季の里公園」](#)*では色とりどりの



ハナショウブ 6月中旬 四季の里公園

ハナショウブが美を競います。時期を外さずに、出かけてみてはいかがでしょうか。

みずき野には残念ながらハナショウブはありませんが、この季節も花壇にはいろいろな花が咲いています。今回は、初夏の終わりから梅雨にかけての花壇の花を見ていきたいと思います。

* 守谷駅西口1番のりばからモコバス（A・左回り）で10分、みずき野から車で15分程

1 ビジョザクラとヒメビジョザクラ

園芸上バーベナと呼ばれる園芸種がいくつもあります。よく栽培されているのはバーベナ・ホルテンシスとバーベナ・テヌラなどがあり、どちらも北米南部および南米原産のクマツヅラ科の多年草です。バーベナ・ホルテンシスに由来する品種には他のバーベナとの雑種もあって、はっきりと分類するのは困難ですが、一般に



ビジョザクラ 5月下旬 文化財公園石垣下



ヒメビジョザクラ 6月上旬 みずき野ガーデン



ヒメビジョザクラ 6月上旬 第2調整池花壇

は総称してビジョザクラと呼んでいます。バーベナ・テヌラにはヒメビジョザクラという和名があります。ビジョザクラの葉には深い切れ込みはありませんが、ヒメビジョザクラの葉はコスモスの葉に似て深い切れ込みがあり、区別できます。

2 サルビア(セージ)の仲間

サルビアには多くの種がありますが、園芸種を総称してサルビアといいます。セージとも呼ばれ、この名もまたサルビアの園芸種の総称です。しかし、単にセージ(コモン・セージともいう)といえば、ハーブ(香草)として使われるサルビア・オフィシナリスを指します。地中海沿岸原産で、ヨーロッパでは古くから香草や薬草として使われてきました。西洋では、肉料理や魚料理に、またソーセージの成分として欠かせないハーブです。残念ながら写真は持っていません。

みずき野の花壇にはセージそのものは植えられていませんが、セージと名のつく園芸植物がいくつか見られます。いずれも花を鑑賞するものです。

メドウセージと呼ばれるセージには2種あり、ひとつは右の写真のサルビア・ガラニチカ。南米原産の多年草で、夏から秋に咲く赤いサルビアに似て、花弁が長く、色は濃厚な青紫色です。もうひとつはサルビア・プラテンシスです。



メドウセージ 6月上旬
みずき野ガーデン

チェリーセージはサルビア・マイクロフィラの園芸上の名称。メキシコ原産の多年草です。花全体が赤い品種もあります。



チェリーセージ 5月中旬 文化財公園石垣下



ラベンダーセージ 5月下旬 第2調整池花壇

ラベンダーセージは中米から南米に原産のサルビア・ファリナケアと、メキシコ原産のサルビア・ロンギスピカータという2種の間的人工交配によってつくられた園芸品種で、多年草です。前ページの写真のラベンダーセージはサルビア・ファリナケアです。

3 サンビタリア

園芸上サンビタリアと呼ばれている植物には2種あり、両種とも中米に原産するキク科の1年草です(キク科の花の構造は第 3 回「タンポポと類似の野草たち」および第 42 回「花壇の花(3)」を参照)。サンビタリアのひとつはサンビタリア・プロクンベンスで、もうひとつはサンビタリア・スペシオサ。どちらもよく似た頭花をつけ、舌状花は黄色ですが、筒状花(管状花)はプロクンベンスが茶色、スペシオサが黄緑色なので区別できます。みずき野の花壇で見られたものは、サンビタリア・スペシオサです。



サンビタリア 7月上旬 第2調整池花壇

4 マツバギクとマツバボタン

マツバギクはその名と矛盾しますが、キク科の花ではなく、南アフリカ原産のハマミズナ科の多年草、マツバボタンはブラジル原産のスベリヒユ科の1年草です。両種は近縁ではありませんが、共通点は花がベタレインという色素によって彩色されていることです。マツバギクは初夏に赤紫の美しい花を咲かせますが、マツバボタンは夏の炎天下を好み、花は赤、ピンク、橙、黄、白と色とりどりで目を引きま



マツバギク 6月上旬 第2調整池花壇



マツバボタン 7月上旬 第1調整池花壇



植物の色素について

植物を彩る色素の主なものは、葉緑素、カロテノイド(カロチノイドともいう)、アントシアニン、ベタレインの4種ですが、ほかにもいくつかあります。

葉緑素は葉や茎や若い果実に多く、光合成による炭酸同化に必要な色素です。トウダイグサ、オオデマリなど緑色の花もいくつかあります。アマドコロの花は白色ですが先端は緑です。これらの緑色も葉緑素によるものです。

カロテノイドは黄色い色素です。カロテノイドは葉緑素による光合成を助ける重要な役割をもち、葉緑素がある場所にはカロテノイドが共存しています。カロテノイドは黄色い花の色素でもあります。ヒマワリ、タンポポ、キショウブ、その他黄色い花の多くはカロテノイドによって彩色されています。また、アントシアニンとの共存によって、いろいろな色調が作り出されます。

アントシアニンはフラボノイドと総称される物質の一種で、花を彩色する最も主要な色素です。アントシアニンはさらにいくつかの種類に分かれます。化学構造はよく似ていますが、多少の違いによりそれぞれが赤、紫、青など別々の色を持ち、それらの組み合わせによって、いろいろな色彩を花に与えます。サクラ、ツバキ、ツツジ、ハナショウブ、チューリップ、ユリ、キク、コスモス、その他大部分の花はアントシアニンによって彩られます。

植物全体から見ればごく少数ですが、アントシアニンとは化学上まったく異なる色素、ベタレインを含んでいる花があります。例をあげると、マツバギク、マツバボタン、ケイトウ、センニチコウ、ブーゲンビリアなど。ベタレインをつくる植物はアントシアニンをまったく含みません。逆にアントシアニンをつくる植物はベタレインを含みません。

アントシアニンやベタレインの化学構造に興味のある方は、農研機構・花き研究所の各サイト([フラボノイド](#)および[ベタレイン](#))を参照してください。

5 ニチニチソウ

ニチニチソウはマダガスカル島、ジャワ島、ブラジルなど熱帯に分布するキョウチクトウ科の多年草ですが、寒さに弱いので、園芸では春まき1年草として扱われています。花の咲く期間は長く、ひとつの花は数日で終わりますが、花が次々と咲くのでニチニチソウと名付けられました。以前は花の色が単純な赤または白のみでしたが、近年は品種改良が進んでカラフルになり、花の模様も多様になり、花壇の常連になりました。



ニチニチソウ 7月上旬 第2調整池花壇



ニチニチソウ 7月上旬 第2調整池花壇

なお、ニチニチソウは、ビンブラスチンおよびビンクリスチンという2種のアлкаロイドを含んでおり、抗がん剤として用いられています。ただし、これらの薬剤には強い副作用があります。

6 カリブラコア

カリブラコアの仲間は南米原産のナス科の多年草ですが、園芸上は1年草として扱われることが多いようです。カリブラコアには多くの種があって、それらの中から品種改良によって園芸種がつけられました。カリブラコアの花は少し小ぶりですが、ペチュニアの花に大変よく似ており、以前はペチュニアの仲間(ペチュニア属)と考えられていました。しかし、1985年に、染色体数



カリブラコア 7月上旬 みずき野ガーデン

の違いや多少の形態的な違いから、カリブラコアの仲間はペチュニア属とは別属であることが提案され、その後の詳細な研究によって支持されました。現在までに、カリブラコア属の植物からいろいろな園芸品種がつけられましたが、まだペチュニアほど普及していないように思われます。

7 グラジオラス

グラジオラスの仲間はアヤメ科の多年草で、主として南アフリカに原産しますが、ヨーロッパや小アジアなど広い範囲にも存在します。いずれも生育地により種が異なっています。それらの交配により多くの園芸品種がつけられました。グラジオラスには春咲きの品種と夏咲きの品種がありますが、みずき野の花壇では夏咲きの品種が見られます。



グラジオラス 7月上旬 第2調整池花壇

8 ハブランサス



ハブランサス 7月上旬 中央広場花壇

ハブランサスの仲間は南アメリカ原産のヒガンバナ科の多年草です。ハブランサスの園芸種はどのように育成されたか不明です。左の写真のハブランサスはゼフィランサスの仲間のサフランモドキによく似ていますが、サフランモドキでは雄しべが花の中央から長く突き出しているのに対し、ハブランサスは雄しべが短かく、花の中央の筒の中に入っています。サフランモドキはみずき野の花壇には見当たりませんでした。

9 スカシユリとユリの一品種

野生のスカシユリは日本固有種で、花には淡い橙黄色の地に赤紫の斑点があります。ユリの種類は萼片と花弁が同形なので、両者を合わせて花被片と呼んでいます。スカシユリの原種はそれぞれの花被片の基部(根もと)が細く、花被片の間に隙間が見えることから、スカ

シユリ(透かし百合)と名付けられました。多くのユリの仲間は花が横向き、または斜め下向きに咲きますが、スカシユリの花は上向きに咲きます。

野生のスカシユリを基本に、多くの園芸品種がつけられました。これらの園芸品種はやはり花が上向きに咲きますが、花被^{かひ}の基部が重なり合って、隙間のないものもあります。右の写真もそのひとつです。

第2調整池花壇に非常に美しいユリが咲いていました。ネットで調べた結果、トライアンフアーターという品種ではないかと思われる。由来はよくわからないのですが、トライアンフアーターはテッポウユリと他のユリとの雑種のようなようです。なお、ネット上の日本語のサイトの多くはこの品種を

「トライアンファイター」と呼んでいます。英語の綴りは triumphator ですから、日本語ではトライアンフアーターまたはトライアンフェイターと表記するのが正しいと思います。



スカシユリ 6月下旬 第2調整池花壇



トライアンフアーターと思われる
7月上旬 第2調整池花壇

10 アルストロメリア

アルストロメリアの仲間は南アメリカ原産の多年草で、その中で赤色の花をつけるアルストロメリア・プルケルラにはユリズイセンという和名があります。しかしアルストロメリアの仲間が交配され、多くの美しい品種が作られており、園芸上は、それらを総称してアルストロメリアと呼んでいます。また、英語名のインカ・リリーズに由来する「インカのユリ」という愛称もあります。



アルストロメリア 6月上旬 みずき野ガーデン

以前はユリ科の植物とされていましたが、現在はユリズイセン科の植物になりました。ユリと比べると、花は小さいですが、ユリより多彩で、美しさは負けていません。花の多さ、可愛らしさ、さらに切り花は長持ちすることもこの植物の長所です。

アルストロメリアのひとつの特徴は葉にあります。葉は基部でよじれて、裏側が上面になります。葉の上面は緑が濃く、これが実は葉の裏側であることはよく見ないと気づきません。裏側を上面にすることによって、どういうメリットがあるのか不明です。ほかに、葉の裏が上面になる植物として、イネ科植物のウラハグサがあります。ウラハグサはフウチソウ(風知草)とも呼ばれ、斑入りの品種が園芸に利用されています。



アルストロメリアの葉 葉の根もと(基部)でねじれる

追記:「みずき野ガーデン」の花の写真は、北川道子さんによって撮影されたものです。